

## ■■ 天狗の話4話 ■■ ===⇒三州横山話より

### ■ 天狗におどされたという話 ■

東郷村出沢の関原三作という木挽きが、二五、六年前、北設楽郡の川合に近い村で、仲間のもと八人で山小屋に住んでいた時、ある夜、酒を二升ほど買って来て、それを飲んで、あり合せた鋸や石油の缶を敲いて拍子をとって、大乱痴氣をやっていると、山の上からその小屋へ向けて石を投げつけたのを手初めに、おそろしい音をたてて、岩を転がしかけたり、小屋の周囲の大木を、たちまちのうちに鋸で伐り倒したり、何ものか小屋へ手をかけて、今にも倒れるかと思うほど揺さぶったり、そうかと思うと、大きな火の玉が眼の前へ飛んで来て、一気にまた遠くへ飛んで行ったりしたと言います。八人のものは酒の酔いも醒めてしまって、まるで生きた心地はなく、一団に抱き合っていたそうですが、夜の明けた後に見ると、何ら変わったことはなく、まわりの木なども確かに鋸で挽いて倒しかけた音を聞いたのだが、枝一つ落ちてはいなかったということです。

### ■ 鹿に化けていた天狗 ■

某という猟師が、朝早く本宮山へ鹿を撃ちに行くと、行く手の大きな岩の上に、一頭の大鹿が眠っているので、早速丸ごめをして、狙いを定めて撃ったところが、さらに感じないで、鹿は相変わらず眠っているので、次から次と、六発撃っても何の手応えもないので、不審に思って、黄金の丸を出して撃とうとすると、そのときまで眠っていた鹿が、むくむくと起き上がったと思うとたちまち鼻の高い老人になって、さっきからの丸はみんなここへおくから、どうか命は助けてくれと言って、掌に持っていた丸をみんな岩の上において逃げていったという話を、出沢村の鈴木戸作という男から聞きました。

### ■ 一度に鼻を高くした猟師 ■

北設楽郡の三輪村三ッ瀬の明神山は、非常な深山でふだん天狗が住んでいると言われていたところだそうですが、あるとき、その近くの山で小屋を造って仕事をしていた木挽たちが、夜の慰みに、これから明神山を越して里へ行って酒を買って来るものがあれば、その酒を奢ると言って賭けをすると、その中の一人が俺が行って来ると言って、仕度をして出かけたそうですが、それからだんだん明神山の窪深くは行ってくと、向うに猟師が七、八人道の傍らで焚火をしているので、それに力を得て傍らへ行くと、その中の一人がここへ来る道で俺たちの仲間に遇わなかったかと訊くので、さらに見かけなかったと答えると、こんな

人は見なかったかと言いながら、その獵師たちが一度に鼻を高くして顔を差し出したので、驚いてその場に気絶してしまったのを、翌朝になって、仲間の者が助け出したと言います。

### ■ 火をつける神様 ■

遠州の秋葉山や奥山の半僧坊は、天狗の神様だなどと言いますが、ある男が秋葉山に参詣に行くとき、出がけに家内のものに、留守中火の用心をしろと言い置いて、秋葉山へ登ってお籠もりしていると、傍らの木の上で人の話し声がするので、何げなく聞いていると、何々村の何某の家へ行って火をつけて来いと言っているのが、まさしく自分の家なので、驚いていると、間もなくまた話し声がして、ただいま行って参りましたが、なにぶん火の上をすっかり瀬戸物で困っておりますので、火の放けようがありませんと言うので、ますます驚いて、急いで帰ってきて、家へ着いて家内を起こして火の用心のことを聞くと、炉の残り火の上ですり鉢を冠せて置いたと答えたという話があります。